様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ３０ 日現在

機関番号：２４５０５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ１２４１０

研究課題名（和文）認知症の認識とケアに関する研究―EPAで来日する看護師の教育と支援に向けて―

研究課題名（英文）Research on Recognition and Care of Dementia: Toward Education and Support of Nurses Coming to Japan under the EPA

研究代表者
植本　雅治（UEMOTO, Masaharu）

神戸市看護大学・看護学部・名誉教授

研究者番号：９０１７６６４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：看護師や認知症者家族への面接からは以下の現状が示された。ベトナムでは認知症の中核症状(記憶障害・見当識障害など)は加齢現象として捉えられていることが多く、暴力的な行動などがない限り、医療に繋がることはない。認知症者は家族や近隣の人々と共に地域で生活しており、日常生活支援や身体疾患に対する介護は、家族の役割と考えられている。その為、看護師は認知症の知識は有しているものの、具体的な看護や支援方法について考える機会は乏しいようである。一方、高齢者用施設の訪問調査などを通して、高齢者の増加や核家族化などの構造変革、医学的知識の普及に伴い、緩やかな管理・保護体制も限界を迎えつつある状況も示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　認知症患者に対する考え方や対応のあり方は、国や地域によって異なっており、このことは、外国人看護師、介護士が我が国で働く上での障壁の一つともなっている。
　本研究によって得られた知見は、日本で認知症ケアに携わろうするベトナム人看護師、介護士への教育、支援を考える基盤となるものである。
　また、また、認知症に対する認識や対応と伝統的文化や社会構造との関連について、さらに、社会の高齢化や産業発展に伴う核家族化、認知症に関する医学的知識の発展、普及んどがそれらにもたらす影響について、より一般的な考察を進める上でも有用な資料となるであろう。

研究成果の概要（英文）：Interviews with nurses and family members of people with dementia indicated the following current situation In Viet Nam, Core symptoms of dementia (e.g. memory disturbance and disorientation) are often regarded as an ageing phenomenon and do not lead to medical care unless there is violent behavior. People with dementia live in the community with their families and neighbors, and it is considered the role of the family to support daily life and care for physical problems. Therefore, although nurses have knowledge of dementia, they seem to lack opportunities to think about specific nursing and support methods. On the other hand, through surveys of visits to institutions for the elderly, it was shown that with the social structural change of the society such as increase of elderly people, nuclear families , with the spread of medical knowledge about dementia, the tolerant system of management and protection is reaching its limits.

研究分野：精神医学、精神保健学

キーワード：認知症　老年看護　外国人看護師　ベトナム

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

看護師、介護士として我が国で働くことを目指す外国出身者が急速に増えつつあった。

その人たちからは、認知症をはじめとする高齢者の精神疾患の認識やその対応の難しさについて訴えがあり、受け入側の病院・施設や教育機関からも認知症を含む高齢者の疾患や理解に関する教育が難しいとの意見が出されていた。

我々は、それらの問題の背景に、母国での認知症患者についての考え方や対応のあり方と日本におけるそれとが異なっていることがあるのではと考え、看護師・介護士として我が国で働くことを目指している人たちの出身国の一つであるベトナム民主共和国において、認知症に対する考え方、対応のあり方を調査することとした。

２．研究の目的

ベトナム民主共和国における認知症の考え方、対応のあり方を把握し、我が国との違いを明らかにする。さらに、認知症の考え方、対応のあり方と、文化、社会構造、医学的知識の発展・普及などとの関連を考察し、看護師・介護士を目指す外国出身者の支援・教育に有用な知見を得る。

３．研究の方法

(1) ベトナム民主共和国ホーチミン市において、Hochiminh Mental Hospital ホーチミン市精神病院に外来受診する認知症患者の家族を対象とし面接調査を行った。
市内に居住する認知症症状を有する女性の居宅を訪問、生活状況を把握するとともに、支援を行う家族を対象に面接調査を行った。

(2)ホーチミン市において看護師教育に当たっているPham Ngoc Thac University of Medical technology and Medicine 看護学部の教員に認知症対応の現状および、認知症看護の教育について、意見を聞くとともにアンケート調査を行った。

(3) ハリアブンタウ省にある国立高齢者施設「バリア・ブンタウ省社会福祉法人センター（労働傷病兵社会問題局所属）」とブンタウ市内にある私立高齢者施設「百年天徳」を訪問、それぞれの施設と活動状況を見学するとともに、それぞれの施設責任者へのインタビューを行った。

４．研究成果

(1) 認知症症状を有する患者の家族への面接調査を行った。
—患者家族は「認知症」をどのように捉えているのか？

—患者家族や近隣住民は患者とどのように向き合っているのか？

面接調査で得られた結果について、上記２つのことに重点を置き解析、ベトナム社会における「認知症」概念における文化的・社会的特徴を明らかにすることを目的とした。

面接時：認知症=bê□nh suy gia□m tri nhơ□(時々記憶がなくなる病気)との表現が用いられた。

(1)ー①ホーチミン市５区にある公立精神病院を外来受診する認知症患者の家族７ケースへの面接調査（面接はベトナム人通訳１名を介し日本人研究者２名で行った。）

調査結果の概要
受診に至った背景についてどう考えるか
ケース１：物忘れ。記憶障害（亡くなった母親が生きていると思っている。）
ケース２：嫉妬妄想(妻の浮気を疑い、包丁を振り回す。包丁を持って暴れる)
ケース３：暴れる。大声を出す。物をたたく。嫉妬妄想(夫の浮気を疑う)
ケース４：不眠による焦燥感のたかまり
ケース５：遠方への家出
ケース６：不眠
ケース７：意味不明な言動、暴力
原因についてどう考えるか
ケース１：遺伝と環境
ケース２：脳の病気（脳梗塞のあと発症）
ケース３：不明
ケース４：環境要因（ほうっていたから、世話をすると良くなる）
ケース５：自然な経過（心配性だったから）
ケース６：アルツハイマー病（面接に応じた息子が大学卒、本、インターネットで調べた）

ケース７：遺伝

近隣住民の対応について

ケース１：近隣住民は徘徊している患者を見かけたらすぐに家族に連絡をくれる

ケース2:(患者の)子どもたちはよく会いに来てくれる。教会系のボランティアが支援してくれている。

るケース３：近隣住民は患者の症状を知っているので目を離さないようにしている。バイクタクシーで遠方に行こうとした患者を近隣住民が阻止してくれたことがある

ケース４：回答なし

ケース５：近隣住民は「ただの物忘れだから、よくお世話してあげたら治る」と助言をくれた

ケース６：近隣住民は患者に対して発症前と変わらず接してくれている

ケース７：都会なので近隣住民は患者に対して関心がない

以上をまとめると。

１）精神科医療受診のきっかけになるのは、情緒的な興奮や暴力行為であり、物忘れなど認知能力の低下のみで病的と取り扱われることは少ない。

2）認知症の背景としては環境要因、遺伝要因などがあげられる。本調査においては「アルツハイマー病」の名を挙げたのは 7 ケース中 1 ケースのみであった。当該面接対象者は大学卒であり、ネット検索で知識を得たとのことであった。

3）近隣住民は認知症者やその家族に対し概ね好意的であり、支援的であるが、「都会なので関心が乏しい」と言う意見も見られた。

（1）－②ついで、認知症者の具体的な生活状況を把握するため、家庭訪問を行った。面接結果の概要は以下の通りである。

「認知症」が疑われる女性は 1943 年生まれ

女性は息子、息子の妻、孫との 4 人暮らし＊インタビューに応じてくれたのは息子の妻(40 代)

高血圧、糖尿病の治療のため通院しているが精神科へは通院していない

現在の様子―たまに物忘れが出現する

息子の妻が異変に気づいたのは 1 年前(同じ動作の繰り返し)、物忘れは 4 年前から始まった

認知症の原因にはアルツハイマーと老化と二つあると考える。

認知症は治療不可だと考えている(投薬で治ると思わない)

認知症を発症した理由は、①老化、②糖尿病、③苦労した人生だと考えている

現在の住まいに 20 年前から住んでいるから近所の人が優しくしてくれ、何かあると家族に知らせてくれる。

近所に住む(息子の妻の)きょうだいが助けてくれる

日常で注意していることは「入浴中の転倒」と「電気コードによる感電」

インターネットで「認知症」に関する情報を収集している。

以上をまとめると

1）症状は老化の一環と考えられているが、インターネットなどの知識としてアルツハイマー病という病名は知られ始めている。

2）家族は対象者の認知症状を疾患という明確な認識は乏しく、そのための医療受診を考えていない。

3).対象者の明確な行動制限を受けることはなく、その生活は家族や近隣住民による支援を受けている。

上記の二調査結果からは、以下のような認知症患者の生活状況が浮かび上がる。

暴力などの激しい行動化があれば、医療に結びつくがあるものの、記憶障害、指南力の低下などの認知症中核症状のみでは、疾患として捉えられることはなく、家族の支援を受け、近隣住民も含めた緩やかな管理の中におかれている。

このような対応が当然のこととされ、継続して行える背景には、ベトナム社会での伝統的な家族構造や近隣住民との関係性があると考えられる。（文献①,②）

（2）医療系大学教員との協議及び、以前に行った現役看護師への面接（文献③）から以下のようなことが示唆された。

看護師は認知症に関する知識を有している。しかし、（1）で触れたように、認知症患者が医療に結びつくことは少なく、主に家族の支援を受け生活しており、身体的疾患のため入院することがあっても、家族が付き添い、生活面でのケアに当たることが多いようである。そのため看護師が、認知症患者に直接接する機会が乏しく、有する知識を実践に生かす機会が少ないのではないかと考えられた。

高齢者はその家族が面倒を見るのが一般的であるが、近年、都会においては、家族単位が小さくなり、夫婦とともに働きに出ることも少なくなく、同居高齢者の面倒を見ることが困難になるケースも出てきている、また、認知症に関する認識が広がりつつあることもあり、今後、都会を中心に、認知症患者への社会的な対応が急速に変化していくであろう。

上記、医療系大学においても高齢者介護のための短期教育コースの設立も計画しているとのことであった。

⑶高齢者施設訪問調査について

（3）―①国立高齢者施設

施設の概要：社会福祉センターであり、市街からは遠い地域にあり、高い塀で囲まれた施設となっている。内部は、精神疾患部門（1 号）、高齢者部門（2 号）に分かれており、お互いに移動することがある。高齢者であり精神疾患である人の状態が良くなったら、第 2 号に移動することがある。逆に 2 号の人が精神疾患になったら 1 号に移動させることがある。
訪問時には高齢者部門には 87 人入所。精神疾患部門には約 600 人が入所しているとのことであった。
入所条件は、60 歳以上で、親戚がいない（＝子どもがいない）こと。親戚があっても、生活に困窮していることが認定されれば入所できる。本施設は 2000 年頃に設立、これまで毎年 80 人以下くらいの希望数であったが、2020 年くらいから 100 人以上に増えている。
施設の運営は国からの支援によっており、入所者の金銭的負担はない。しかし、2023 年 6 月からは民間化され、国以外の企業からの寄付を受けて運営されることになる。

（3）―②私立高齢者施設
施設の概要：ブンタウ市内の住宅地にあり、かなり立派な住宅を改造した建物 3 軒よりなる。それぞれの建物は入居者の介護の必要度に対応している。1 号は 2019 年、2 号は 2020 年、3 号は 2022 年末より入居者の受け入れを始めており、ベトナムで最初の私立高齢者施設であるとのことであった。
現在入所者数はＭ 1 号には 16 人、2 号にも 16 人、3 号には 3 人で合計 35 人。管理者によるとかなりの入居者に認知症状があるとのことであった。
費用は食費込みで 900 万-1800 万ドン/月（4 万 5 千-9 万日本円）。要介護の場合 100-400 万ドン追加。高齢者が受ける年金額に比しかなり高額となる

以上、両施設を訪問し、それぞれの管理者への質問の結果、以下の傾向が把握された。
ベトナム民主共和国においては元来、公立施設のみであった。施設は郊外にあり、外出も制限されざるを得ない状況にある。本来、このような施設は家族の支援が受得られず、生活に困窮している高齢者を対象とするものである。2018 年に行われた高齢者対象の調査報告 Ageing and Health in Viet NamAgeing and Health in Viet Nam **においても、高齢者施設は面倒をみてくれる家族がいない高齢者のためのものであると考える人が多いことが示されている。また、高齢者を施設に入所させること自体が** stigma **となる可能性も指摘されている。（文献③）**
一方、私立施設は最近でき始めたところであり、町中にあり外出も容易であり、居住設備も良いが、かなり高額の費用が必要である。
今後、高齢者人口の増加に加え（1）で触れたような認知症知識の普及、（2）で触れた社会構造の変化などから、高齢者対象の施設数が急速に増えていくであろう。また、それに応じ、上記二施設それぞれの得失を踏まえ、施設も多様化、認知症患者の受け入れも進むことが予測できる。
しかし、認知症患者が、そのような施設に受け入れられるようになることが、（1）で見たような家族、近隣住民による支援と緩やかな管理のもとでの生活を続ける現状に比し、進

歩と言えるのかについては、疑問が残ることではある。

引用文献

① **岩井美佐紀　2005　「ベトナムの家族・親族と近代化に関するレビュー」加藤譲治（研究代表者）、岩井美佐紀、晨晃、花澤聖子、林史樹**
『東アジアの近代化と社会変動プロジェクト：ベトナム・台湾・中国・韓国・日本における家族と近代化に関する基礎研究』　(ページ数掲載なし)

② Mai Thi Tran, Linh Thuy Dang, and Nguyen Cong Vu、 Ageing and Health in Viet Nam Ageing and Health in Viet Nam、Chapter 10 Services for Older Persons 2020　125 -138

③ 三浦藍 2019 ベトナムの看護師の認知症に対する認識 第 26 回多文化間精神医学会学術総会

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 野上恵美
２．発表標題 ERIAレポートChapter1～7概要報告
３．学会等名 第2回　ベトナムのケア研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 三浦　藍
２．発表標題 ELIA Report 雑感、医療・看護研究の視点RR
３．学会等名 第2回　ベトナムのケアの研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 野上恵美
２．発表標題 RIA Reportレビュー（1）第1-9章を中心に
３．学会等名 第3回　ベトナムのケア研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 三浦　藍
２．発表標題 ERIA Reportレビュー（3）医療・看護研究の視点から
３．学会等名 第3回　ベトナムのケア研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 三浦藍、植本雅治、磯部昌憲、野上恵美
２．発表標題 ベトナムの看護大学生の認知症に関する認識調査についての報告
３．学会等名 第一回ベトナムのケア研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 三浦　藍
２．発表標題 ベトナムの看護師の認知症に対する認識
３．学会等名 第26回多文化間精神医学会学術総会
４．発表年 2019年

１．発表者名 野上　恵美
２．発表標題 ベトナムにおける「認知症」概念をめぐる文化的・社会的背景に関する一考察
３．学会等名 第26回多文化間精神医学会学術総会
４．発表年 2019年

１．発表者名 瀧尻　明子
２．発表標題 ベトナムの精神障がい者家族が捉える精神の病
３．学会等名 第26回多文化間精神医学会学術総会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	三浦　藍 (Miura Ai) (10438252)	四條畷学園大学・看護学部・准教授 (34444)	
研究分担者	平野　裕子（小原裕子） (Hirano Yuuko) (50294989)	長崎大学・医歯薬学総合研究科（保健学科）・教授 (17301)	
研究分担者	瀧尻　明子 (Takijiri Haruko) (70382249)	島根大学・学術研究院医学・看護学系・講師 (15201)	
研究分担者	野上　恵美 (Nogami Emi) (90782037)	武庫川女子大学・文学部・講師 (34517)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関